

平成29年度筑波大学附属図書館特別展

# 江戸の遊び心

- 歌川国貞の描く源氏物語の世界 -



三十一  
歌川国貞



平成 29 年度 筑波大学附属図書館特別展

# 江戸の遊び心

- 歌川国貞の描く源氏物語の世界 -

会期 平成 29 年 10 月 10 日 (火) ~ 11 月 19 日 (日)

会場 筑波大学附属図書館 (中央図書館貴重書展示室)

主催 筑波大学附属図書館 / 筑波大学図書館情報メディア系

#### 凡 例

1. 本書は平成 29 年度筑波大学附属図書館特別展「江戸の遊び心 - 歌川国貞の描く源氏物語の世界 -」(会期:平成 29 年 10 月 10 日(火)～11 月 19 日(日))の図録である。
2. 本図録に掲載されている資料は、特に記載のない限り筑波大学附属図書館が所蔵する。
3. 本書の図版番号は、展示の順序とは必ずしも一致しない。また、一部の展示資料については、本図録への掲載を割愛した。
4. 掲載資料の表題等の書誌情報や解題等の漢字表記は、原則として通行の字体に改めた。
5. 本書は、以下の分担により執筆し、研究開発室(谷口・山澤)および特別展ワーキング・グループで編集を行った。

第 1 部 吉森佳奈子(人文社会系准教授)

第 2 部～第 4 部 綿抜豊昭(図書館情報メディア系教授)

第 5 部 時井真紀(図書館情報メディア系講師)

コラム「香の歴史と源氏香の図」寺田早苗\*

コラム「歌川国貞(三代豊国)と源氏絵」古谷美也子\*

(\*人間総合科学研究科博士前期課程 2 年芸術専攻)

# 目次

目次	1
附属図書館長ご挨拶	2
図書館情報メディア系長ご挨拶	3
第1部 『源氏物語』と出会う	4
第2部 『源氏物語』の知識化	10
第3部 紫式部像	16
第4部 源氏絵の世界	20
夕顔	
蜻蛉	
幻	
紅葉賀	
須磨	
松風	
若紫	
若菜上	
葵	
夢浮橋	
第5部 デジタル技術と資料の融合 ～源氏絵から読み解く平安時代のくらし～	34
掲載資料一覧	37

## 附属図書館長ご挨拶

附属図書館は、これまで学内組織の協力を得つつ、本学が所蔵する貴重資料などを広く公開する展示事業を行ってまいりました。一昨年度は「数学の叡智 - その探求と発展 - 」と題した理数系領域初の展示、昨年度は「歴史家 二宮宏之の書棚」と題した歴史家の旧蔵書の展示と、毎年様々なテーマで特別展を開催し、好評を博しています。

今回の特別展は、図書館情報メディア系綿抜豊昭教授のご指導のもとに、附属図書館と図書館情報メディア系との共催により、「江戸の遊び心 - 歌川国貞の描く源氏物語の世界 - 」と題して、『紫式部源氏かるた』を中心に各種資料を紹介することになりました。

『源氏物語』は、「桐壺」や「葵」といった巻名・内容はもちろん、作者の紫式部、主人公の光源氏などが、広く知られている作品です。本特別展では綿抜教授を中心に3名の先生方に様々な視点から『源氏物語』について解説していただきました。第1部は本学に所蔵する『源氏物語』の貴重書を中心に『源氏物語』との出会いについて、第2部は『源氏物語』が世の中にどのように知識化されたかについて、第3部は作者の紫式部像について、第4部は『源氏物語』をビジュアル化した「源氏絵」について、そして、第5部では最新のデジタル技術と貴重資料が融合した浮世絵鑑賞システムについて、それぞれ紹介いたします。

各部での展示資料は、書物としての『源氏物語』から浮世絵の『紫式部源氏かるた』まで多岐にわたり、様々な形で表現された、豊かな『源氏物語』の世界を知ることができると思います。図録には本学芸術専攻の院生によるコラムも寄稿されており、図書館情報メディア系、人文社会系、芸術系と文理にまたがる様々な研究領域から、その成果を共に公開できるのは、総合大学としての筑波大学ならではのことであり、その基盤として常に異分野間の交流が盛んに行われていることがご理解いただけたと思います。皆さまには、展示される資料にさまざまな興味・関心をお寄せいただき、『源氏物語』の新たな世界を発見されることを期待しています。

附属図書館特別展は、本学に蓄積された豊かな「知」を積極的に内外に向けて発信する、という附属図書館の取り組みの一つです。是非とも、多くの方々に、ご高覧いただければ幸いです。

平成29年10月

附属図書館長 西川 博昭

## 図書館情報メディア系長ご挨拶

附属図書館と図書館情報メディア系の共催で、特別展「江戸の遊び心 - 歌川国貞の描く源氏物語の世界 -」を催すこととなりました。二代目歌川国貞は梅蝶楼国貞とも呼ばれ、後に四代目歌川豊国を襲名した幕末から明治期にかけて活躍した絵師ですが、数多くの源氏絵を残しています。本特別展では本学が所有する国貞の『紫式部源氏かるた』を中心に、他の浮世絵師の源氏絵なども参考として展示しております。

また、10月28日（土）には、図書館情報メディア系 綿抜豊昭教授による講演会や展示室でのギャラリートークも開かれます。講演等を聞いた後で、再度作品を見直しますと、また違った鑑賞を楽しめるのではないかと思いますので、ぜひ足をお運びください。

つい最近、偶然にも現代語に翻訳（翻案）した『源氏物語』を読む機会がございました。オリジナルをきちんと読んだわけではないので、どの程度、原作に忠実なのかはわかりませんが、現代でもその面白さは色あせないストーリー性を持っているように思われます。ごく普通の文庫本の小説なのですが、挿絵も多く入っています。多分若い人たちに受けるための趣向かと思われそうですが、その挿絵が現代的なマンガになっていました。私のような年配の者には、『源氏物語』と少女マンガ風の挿絵が、必ずしもじっくり来るわけではないのですが、若い世代には、何の抵抗もなく入っていくのかもしれませんが、多分それと同じ発想かもしれませんが、今回展示されている、浮世絵による源氏絵も当時としては現在のマンガと同じように、難しい文学を広く庶民に浸透させるための役割を担っていたのかもしれません。

さて、今回の展示では、源氏絵をデジタル化し、Kinectという道具を使って、鑑賞者の動きをPCに取り込み、それに合わせてインタラクティブに鑑賞するという試みも行なっております。いくつかのテーマの中から興味あるテーマを選んでいただくと、それに対応した解説が提示されたり、また源氏絵に動きを加えることで、浮世絵の世界に少しでも入り込む感覚を味わっていただけるのではないかと思います。

『源氏物語』のストーリーをご存知の方は、場面を想像しながら、また、ストーリーを詳しく知らない方でも、十分に楽しんでいただけるものと思っております。

平成29年10月

図書館情報メディア系長 松本 紳

# 第1部 『源氏物語』 と出会う

『源氏物語』成立の経緯については、大齋院選子（964-1035）の依頼を受けた中宮彰子（988-1074）が紫式部（生没年不詳）に執筆を求め、須磨巻から書き始められたという説、紫式部の父藤原為時（生没年不詳）が作り、細かなところを娘に書かせたとする説、さらに、紫式部がこの物語を書いた罪で地獄に堕ちたとする話まで、さまざまに説話的に伝えられているが、確かなことはわからない。

『更級日記』で、菅原孝標女（1008-?）が、継母や姉らの話を聞いて『源氏物語』へのあこがれを募らせてゆくさまは、平安文学のなかでも印象的な場面であるとともに、最初期の享受のさまを伝えるものである。ここに見られるように、『源氏物語』について確かなのは、途切れることなく読まれ続けたという点である。

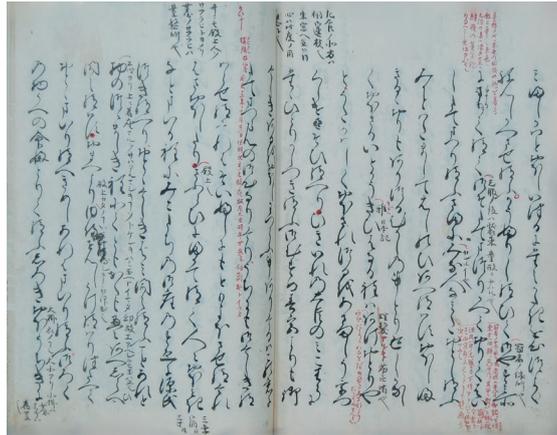
11世紀初頭に成立したといわれる『源氏物語』が読み継がれてきた状況は、ひとつの閉じた世界ではない。藤原俊成（1114-1204）が、『建久四年六百番歌合』の判詞で、「源氏見ざる歌よみは遺恨のことなり」と言っていることは有名である。『源氏物語』が、和歌や連歌を学び詠む際の必読書とされたことは、この作品が広く、途切れることなく読まれた、大きな理由のひとつであろう。しかしそれ以外にもさまざまな『源氏物語』との出会い方、向きあい方があった。『源氏物語』がどのように読まれ今日まで生きてきたのか。何が受け継がれ、また受け継がれなかったのか。それを具体的な資料に即して見ることで、その時々の人々が実際に生きていた空間のなかに『源氏物語』を解き放つことを試みたい。



## 資料1-1 『源氏物語』（ル120-44/貴重書）

写本。53冊。江戸時代中期の書写か。綴葉装。紺地の表紙に、当該の巻にちなむ下絵が金泥で描かれており、塗の箆筒に納められている。その作りは、江戸時代前期、中期の嫁入り本の典型。胡蝶巻、宿木巻欠。貴重な調度品として保管されていたことをうかがわせ、書入はほぼなし。山路露巻を付す。

※『山路露巻』は、『源氏物語』五十四帖の最後の巻、夢浮橋巻があいまいな終り方をしているとされて、その続きとして創作された。『源氏物語』の一卷としての擬作は『雲隠六帖』等、さまざまに見られるが、『山路露巻』は後の創作であることが、南北朝期頃にはすでに指摘されていたにもかかわらず、『源氏物語』の写本に添えられていることがある。

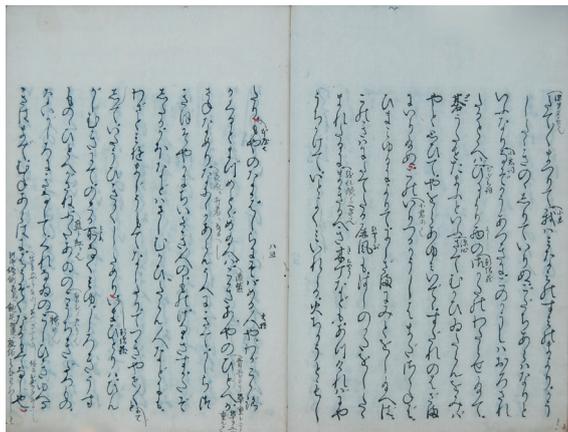
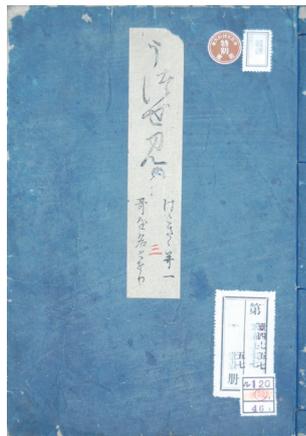


**資料1-2 『源氏物語』 (ル120-370/貴重書)**

写本。47冊。寛永7（1630）年書写か。絵合巻、松風巻、鈴虫巻、夕霧巻、御法巻、蜻蛉巻、手習巻欠。

花宴巻後表紙見返に、「寛永七〔庚午〕年正月十三日住吉神主津守左近発起 如法寺殿御講釈〔西園寺中納言母公〕同八月玄仲講釈之時俄書之」とある。

表紙裏、各丁上部、行間、さらに付箋による、墨、朱墨の書入が多く見られる。筆跡も異なり、また、注の詳しさ、内容についても、初学者向けと思われるもの、注釈研究的なもの等々多岐にわたり、何人かによる、何段階かの書入であると見られる。



**資料1-3 『源氏物語』 (ル120-46/貴重書)**

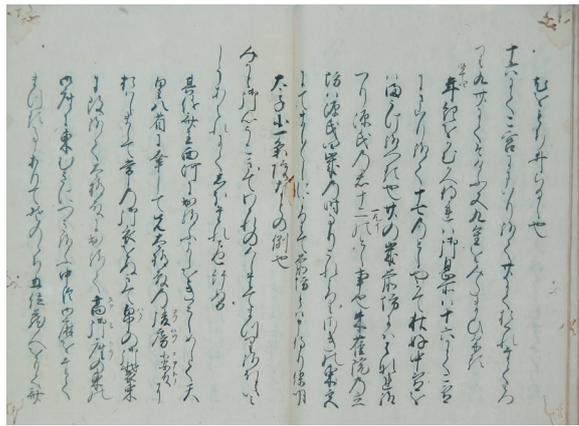
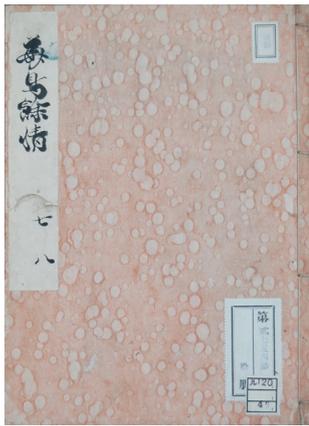
版本。57冊。承応3（1654）年刊 京都 八尾勘兵衛。挿絵入。山路露巻、系図を付す。

表紙裏、各丁上部、行間に、<sup>さいとうひこまろ</sup>斎藤彦麿（1768-1854）による書入がある。

斎藤彦麿は、石見（島根県）浜田藩士。本居宣長（1730-1801）門人を自称し、実質的には、その養子である<sup>もとおりのりなが</sup>本居大平（1756-1833）に師事した江戸時代後期の国学者。

書入は、人物関係、人物の年齢、官職、語の意味等、初学者向けと見られる内容である。

本学所蔵の『源氏物語』三本のうち、二本について、書入がなされていることに注目される。書入の内容は、初学者向けのもの、講義の記録や注釈書の引用等、さまざまであるが、『源氏物語』が今日まで生きてきた道すじは、どのように読まれ、注釈されてきたかを問うことを通して、ある程度知ることができる。



資料1-4 『花鳥餘情』(ル120-49)

写本。10冊。江戸時代初期の書写か。

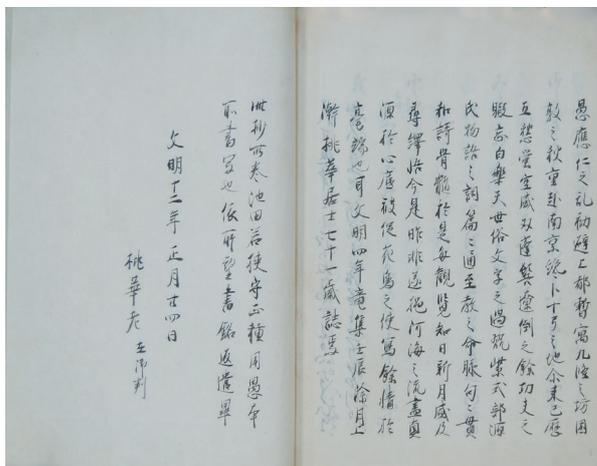
一条兼良（1402-1481）による『源氏物語』全巻注釈。一条兼良は五百年來の学者と評された人で、応仁の乱を避け、奈良での不自由な疎開生活を送るなかでこの注釈書を著したという。兼良が著した最初の段階の本、中国地方の大名で学問を好んだ大内政弘（1446-1495）の求めによる再稿本、さらに、禁裏献上本等、現存諸本はこの何段階かの成立事情を伝えるが、これは、書写者、書写時期等は不明であるものの、兼良が著した最初の段階の本、所謂初稿本系の忠実な写本である。同じ初稿本系の松永本がもつ、四条隆量（1429-1503）（松永本書写者）による識語がこの本には見られない。



資料1-5 『花鳥餘情』(ル120-369)

写本。15冊。書写時期、書写者不明。

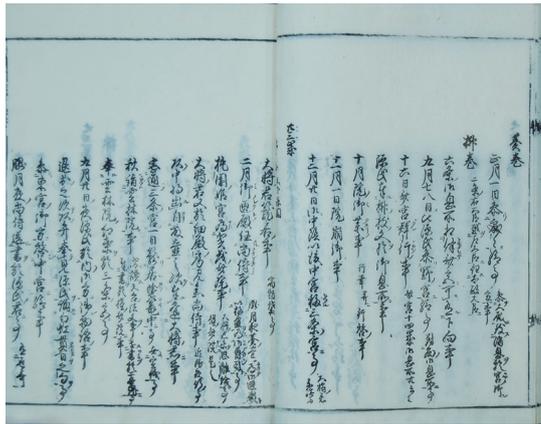
文明四年記奥書の後に、「此抄卅卷池田若狭守正種用愚本所書写也依所望書銘返遣畢 文明十二年正月廿四日 桃花老 [在御判]」とある。これは、内閣文庫本（伝梶井宮堯胤親王筆）に見られるものである。



『花鳥餘情』は、『源氏物語』が、他の物語とは異なり、年表が書けるような時間の流れをもつことに注目した注釈書である。

もちろん、『源氏物語』以外の物語でまったく時間に関する言及がなかったわけではない。たとえば、『源氏物語』絵合巻で「物語の出で来はじめの親」といわれる『竹取物語』で、かぐや姫に求婚した五人の貴公子たちが、与えられた難題の解決に要した時間は「三年」と繰り返されるが、彼らは同時に難題解決の行動を起こしたのか、あるいは、それぞれ順番待ちをし、他の人の失敗を見届けてから自身の難題に取りかかったのか。常識的には前者であろうが（後者とすると十年以上かかってしまい、かぐや姫も年を取ってしまう）、物語のなかにそのことを示す言葉が確かに記されているわけではなく、どちらとも読み取れるような書き方となっている。これに対し『源氏物語』は、他の物語作品と同様、年月に関する言及をほとんど持たないが、まれに記される登場人物の年齢と、各巻のできごととを見合わせることで、詳しい年表が描けるような記述となっている。そのこと―「年立」と言う―に注目して物語に向き合った早い例が『花鳥餘情』である。現代でも年立は生きており、出版されている『源氏物語』には、光源氏や薫の年齢が記され、流れる時間を意識し、各巻の記述を関連させながら読むのが常識となっている。

『花鳥餘情』は、近世期に出版はされなかったが異文はあまり多くなく（内容に係わるような目立つものがない）、その説が尊重され、忠実に書写されていたことがうかがわれる。『花鳥餘情』の説は、現代の研究や読書のなかに受け入れられて生きており、『源氏物語』を読んで理解するための、現代に至るまでの基礎を提示した注釈書といえる。

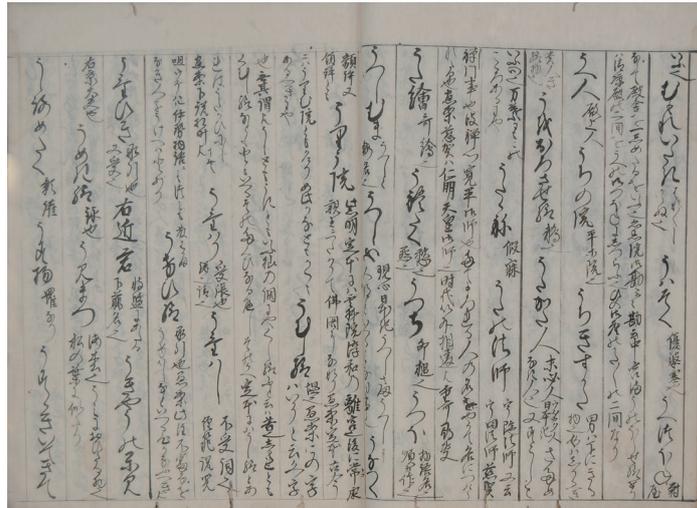


#### 資料1-6 『湖月抄』(ル120-257)

版本。60冊。延宝元(1673)年跋。書林 林和泉／村上勘兵衛／吉田四郎右衛門／村上勘左衛門。

北村季吟(1624-1705)による『源氏物語』注釈書。この書のように、『源氏物語』本文と注釈とを一覧しながら読むことのできる本（それまでは、『源氏物語』本文と注釈書とは別に持たなければならなかった）が延宝期頃出版され、『湖月抄』は、『源氏物語』注釈書のなかでも最も流布した。『湖月抄』は『源氏物語』五十四帖の注釈のほかに、「発端」、「表白」、「年立」、「系図」、「雲隠説」を加え、六十冊とすることが多いが、収められた「年立」は、兼良の晩年の子、一条冬良(1464-1514)による永正七年跋が見られ、『群書一覽』によれば、一条兼良『源氏物語年立』に季吟が書入をしたものであるという。

ここにあげた『花鳥餘情』や『湖月抄』が、現代に通じる、『源氏物語』を読んで理解するための注釈だとしたら、それとは異なる、物語を読んで理解するために何故必要なのが、現代人にはよくわからないことを載せている注釈もある。このような注釈書も、『源氏物語』享受のひとつの流れを作っている。



資料1-7 『仙源抄』 (ル120-190/貴重書)

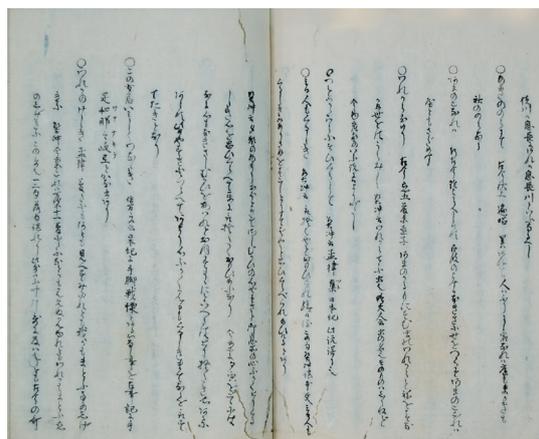
写本。1冊。元和4 (1618) 年、葛山弥三郎書写。幕末から明治期の儒学者亀田鶯谷旧蔵本。

南朝第三代長慶天皇 (1343-1394) による『源氏物語』注釈書。跋 (自跋といわれる) によれば、弘和元 (1381) 年成立、『源氏物語』中の言葉をあげ、いろは順に配列する。四十ほどの写本が現在に伝えられており、この本は、1933年に『新校群書類従』に活字化された際の校合本として用いられた。

『仙源抄』は、約940の項目が立てられ (諸本によって項目数等が異なるため、概数で示す)、その約7割が、『源氏物語』中の言葉 (和語) に漢字をあて、その訓を媒介として意味理解を与えようとする注で、それらがいろは順に配列されるという形式から、『源氏物語』辞典と捉えられてきた。その形式を見ると、『仙源抄』を辞書とするのは、その特色をよくついているともいえる。

しかし一方で、辞書というには、『源氏物語』理解のために何故必要なのかがよくわからないようなところも認められる。たとえば、「うつし心 現心 [日本紀] うつしまうつし人などいへるみな同事也」という注で見ると、「うつし心」という言葉 (『源氏物語』中では、紅葉賀巻、葵巻、薄雲巻、柏木巻に見られる) について、「現心」と漢字をあてて意味を示し、さらに似た意味の言葉をあげているのは、たしかに『源氏物語』辞書といえる。しかし、ここに見られる「日本紀」は何を意味するのか。これが『源氏物語』を読んで理解するために必要だとは思えないのであるが、『仙源抄』の項目のうち約127例に、このように、「日本紀」、「万葉」、「文選」のように出典が記されている。単に『源氏物語』に見られる和語を、漢字との対応関係のなかで理解するというのであったら、出典を記すことは必然ではないが、このような出典表示は当時の辞書類にも見られて広く生きており (『仙源抄』の記事がそのまま辞書類に引用されている場合も少なくない)、中世の人々にとってはそれが大事なことだったのである。

中世において『源氏物語』がどのような教養を共有して読まれていたか—現代のわたしたちは失ってしまって、その意味を理解することができないようなこと—が、『仙源抄』からうかがわれる。



#### 資料1-8 『源語導蒙抄』(ル120-57/貴重書)

写本。8冊。寛政4(1792)年成立。源嶋万呂(生没年不詳)。内題のほかに巻末にも「源語導蒙抄と名つけ」とあり、著者による命名と見られる。入門書として著されたものか。本学附属図書館にのみ所蔵される『源氏物語』注釈書。

『源語導蒙抄』は、『河海抄』、『細流抄』等、早い段階の『源氏物語』注釈書の説をあげるほか、契沖(1640-1701)や賀茂真淵(1697-1769)の説など、近世の『源氏物語』研究を多く引用する。古い『源氏物語』注釈書の説に関しては、典拠を記さない場合も多く、直接ではなく、『湖月抄』等からの引用であると見られる。引用される契沖の説は、『源註拾遺』と重なる。賀茂真淵の説については、『源氏物語新釈』と重ならないものを含み、貴重である。著者自身の説としては、『源氏物語』中の言葉を、当時のわかりやすい言葉におきかえて理解を助けるような性格のものが多く、『源氏物語』(資料1-3)に見られる斎藤彦磨による書入と通じるところがある。

『源語導蒙抄』が、『仙源抄』に見られた「つと 集 [日本紀]」について、契沖の説を引き、これが『日本書紀』に見られないことを批判していることは注目される。『源語導蒙抄』の、契沖、真淵の引用はほぼこのような、先行する『源氏物語』注釈書のあげる言葉の出典表示が、もとの本に見られないことを批判的に指摘するものである。

『源氏物語』の言葉について「日本紀」と出典を記した中世の『源氏物語』理解に対し、近世の人々は、それが出典とされる書に見られるのかどうかを問題とし、それによって正しいか否かがあげつらわれた。しかし一方で、「きひはなる 稚 [日本紀] いときなき也」のように『仙源抄』に見られ、契沖らによって『日本書紀』に見られないことが指摘されている言葉が、『源氏物語』(資料1-2)に書入されており、近世においてもこのような注は生きていたことがうかがわれるのである。

現代のわたしたちが『源氏物語』に出会うときに共有している理解の方向性、共有できなくなっている注のいずれもが、『源氏物語』を生き続けさせてきた。

## 第2部 『源氏物語』の知識化

平安時代に紫式部が著したとされる『源氏物語』は、江戸時代、出版業者などにとって、もっとも有力なコンテンツの一つであった。『源氏物語』は、本文そのものがテキストとして出版され、関連商品として、挿絵を入れたもの、注を付したものなどが出版された。

『秀玉百人一首小倉棗』（資料2-1 個人蔵）には、右から順に『二十一代集』（勅撰和歌集）、『源氏物語』、『湖月抄』が、木箱入りで床の間に置かれている様子が描かれている。『湖月抄』は、江戸後期においてはもっとも有名な『源氏物語』の注釈書である。1832年に刊行された『御家流 女用文宝箱』（図1 個人蔵）にとりあげられた文例に「湖月抄ひさうの草紙」とあるように、「ひさう（秘蔵）」本になりうるもので、その横で平積みされた他の本とは、扱いが少々異なっていたことがうかがえよう。

『源氏物語』は、なにぶんにも大部な物語なので、このように全巻を揃えて所持できた人は限られていた。また全巻を読み終えることができた人もけっして多くはなかったようである。たとえば「須磨源氏」という言葉がある。この言葉の誕生は、そのことを背景にしている。いうまでもないかもしれないが、最初の「桐壺」巻から読み始めたものの、最後まで読み通すことができず、54帖中12番目の「須磨」巻で読むのをやめた人をからかった言葉である。

なお、こうした全巻を読むことができない人や、内容だけは教養として知っておきたいという人のための本も出版された。いわゆる「あらすじ本」である。現代でも、単に内容がわかればよい場合は、簡単にまとめたもので済ませていることが多いようである。

資料2-2は『源氏物語』を読む婦人を描いた、浮世絵師溪斎英泉（1790-1848）の浮世絵（個人蔵）である。女性が『源氏物語』を読んでいる絵は少なからずあり、男性ではなく、女性が読んでこそ絵になるといえようか。現代の若い方には理解しがたいかもしれないが、眉を剃った女性が『源氏物語』を読む姿には妖艶さが伴った。『源氏物語』は、たとえば加賀藩士富田景周（1746-1828）著『なでしこ』に

常に見たらむには、みやび（風流）のよすがともなり、又よしあしのあとにつけ、こころのたしなみとなるもすくなからじ。

という長所だけでなく

ただすぎごと（淫事）のおほき書なれば、これに心うつりまよひたらむは、くらぶの山のかひなかるべし。

という短所が記される読み物であった。



資料2-1 『秀玉百人一首小倉棗』  
（個人蔵）

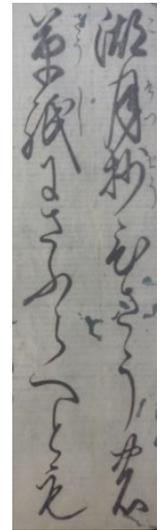


図1 『御家流 女用文宝箱』の  
一部（個人蔵）



資料 2-2 『池鯉鮒』 源氏物語を読む婦人  
(個人蔵)

『源氏物語』は、このように裏も表もあるものだと認識された上で、表立っては「雅な世界」を象徴するものとして、関連することが享受され、活用され、日本の伝統文化で重要な位置を占めてきた。むろん江戸時代の一般人も享受し、「最低、この程度は知っていたほうがよい」とされる、いわば「源氏物語知識(教養)」が形成されていった。それを端的に表すのが往来物に附載された『源氏物語』関連事項である。

往来物は、いわば学習テキストで、寺子屋など学習施設や家庭教育で用いられ、膨大な資料が出版された。往来物によって、『源氏物語』関連事項のありようは異なるが、比較的よく見かけるものは

「源氏物語香の図」

「源氏物語巻名」

「源氏物語引歌」

「源氏物語絵」

(以下「源氏物語」を「源氏」と略す) から成る。『永操百人一首』(資料2-3 個人蔵) 掲載の「源氏目録歌並香圖」のように大本の見開きを使用して「一覧」となることもあったが、多くは頁の上の部分に数分割れて掲載された。



資料 2-3 『永操百人一首』 源氏目録歌並香圖 (個人蔵)

次に図2の右側をご覧ください。『錦囊百人一首大成』（個人蔵）に掲載される「手習」巻の絵である。右上にある五本線が「源氏香の図」、すぐその下に「源氏絵（その1）」（ここでは、机、筆等が描かれている）、その下に巻名「手習」、その左側上部に書かれた文字が「源氏引歌」（浮舟の手習い歌「身をなげしなみだの川のはやきせをしがらみかけてたれかとどめし」）、その下が「源氏絵（その2）」（ここでは尼が訪ねる場面）である。



図2 『錦囊百人一首大成』の一部（個人蔵）

「源氏絵」は、人物が描かれる場合と、そうでない場合がある。小さくてわかりにくいですが、『永操百人一首』（資料2-3）は人物がない図であり、図2は二つとも描かれている。多くの「源氏絵」は、どちらか一方である。

人物が描かれる場合は、その巻で最も代表的な場面が簡略に描かれる。いわば名場面である。ただし絵師によって各巻の名場面が異なり、絵も異なることがある。

人物が描かれない場合は、象徴的なものが描かれる。繰り返しになるが、たとえば「手習」巻では、手習で使用する文机、料紙、筆が描かれる。

たまに遊び心のあるものもある。たとえば『聚玉百人一首』（図3 個人蔵）である。「箒木」巻であれば、箒木は「ほうき」に使用されるため、ちり取りが描かれる。こうなると「謎解き絵」のジャンルである。また「空蟬」巻においては、「空蟬」はセミの抜けがらを意味するが、セミそのものが描かれたりもする。むろん、セミの抜けがらを描くものもある。余談になるが、往来物のセミの挿絵は下手すぎるものが少なくない。



図3 『聚玉百人一首』の一部（個人蔵）

「源氏引歌」は、巻名の由来になった和歌のことで、巻の中から引用されている。七五調のリズム感があると覚えやすいようで、江戸時代には多くの教訓歌が作られたが、同様に「源氏引歌」も覚えやすかったものと思われる。「百人一首」ほどではないが、和歌の学習にも使用されたものと思われる。

「源氏香」とは、五種類の香を順番に聞いていき、どれとどれが同じか、あるいは全部違うかをあてるものである。答えるときに、五本の縦線を引いたものに、同じ香を横線でつないで示した。五種類の組み合わせなので、五十二通りある。『源氏物語』は五十四帖あるので、始めと終わりを除くと五十二になる。それを重ね合わせたのである。しかし、実際に源氏香を楽しむ人は、最初(「桐壺」巻)と最後(「夢浮橋」巻)に図がないことを知っているが、そうではない人にとっては、どうも中途半端で心地悪かったのだろうか、往来物に載るものにはどちらにも付いているものがあり、また片方だけないものもある。先にあげた『永操百人一首』(資料2-3) および図3は、「源氏香の図」が「桐壺」「夢浮橋」に付いており、図2は付いていないものである。

この源氏香の図は、日本文化史上看過できないものである。そもそも長編物語だった『源氏物語』が、要約されることで短くなり、それを引歌ですませ、ついには巻名と絵になり、最終的に五本線となり、いわば「源氏物語ブランドロゴ」となった。源氏香の図は、日本の雅を象徴するロゴとなり、『其ゆかり鄙のおもかけ』三編下(図4 個人蔵)や『教草女房形気』九編上(図5 個人蔵)のように、草双紙などの裏表紙の文様に使用されている。図4は「貝合わせ」のデザインを用い、図5は、「源氏」つながりで、御所車の車輪を図案化した「源氏車」の半円を用いて「風車」も描いており、ものごとが良いようにクルクル回ることを暗示した縁起のよいデザインとなっている。



図4 『其ゆかり鄙のおもかけ』 三編下  
(個人蔵)

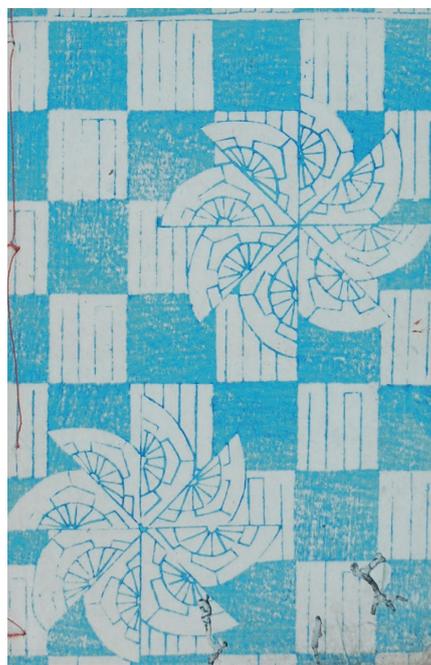


図5 『教草女房形気』 九編上(個人蔵)

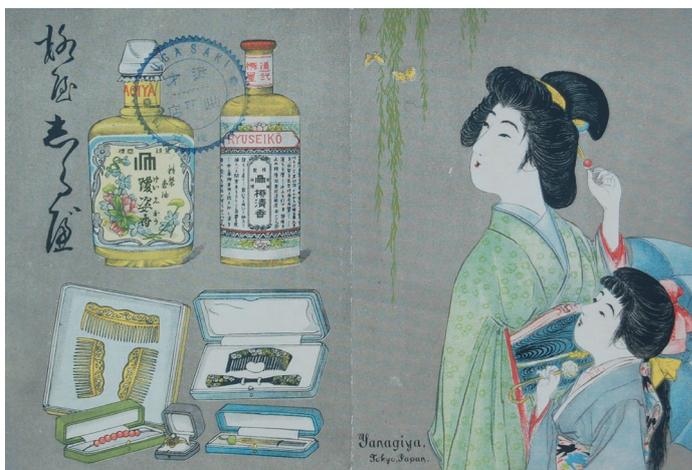
また現代でも源氏香の図は着物や帯の柄に用いられたり、干菓子などの型に使用されているが、楊  
 斎延一（1872-1944）の『女礼式之図』（資料2-4 個人蔵）や、「明治時代に成る石版画」（資料2-5  
 個人蔵）は、どちらも着物の柄に用いられている。また、「柳屋の広告」（資料2-6 個人蔵）では化粧品  
 の瓶のラベル、広重・豊国画『江戸自慢三十六興』「佃沖」（資料2-7 個人蔵）では右下の杯器に用  
 いられている。



資料 2-4 『女礼式之図』（個人蔵）



資料 2-5 明治時代に成る石版画（個人蔵）



資料 2-6 柳屋の広告（個人蔵）



資料 2-7 『江戸自慢三十六興』佃沖（個人蔵）

## 香の歴史と源氏香の図

「お香」は、蚊取線香や仏事の線香など、小さな頃から身近な存在だった方が多いのではないだろうか。最近ではリラクゼーションアイテムとしても再注目されているが、日本に伝来してからの歴史は長く、もともとは奈良時代以前に宗教儀礼として伝わり、使用目的は仏に供えるための「供香」であった。神聖な空間を浄化するものとして使われ、次第に仏事だけでなく、貴族の暮らしに取り入れられていった。平安時代には季節や天候に合わせて大切な人を迎える際に丸く練り固めた「練香」を室内や着物に薫き染める様子は、『堤中納言物語』といった王朝文学、土佐光則（1583-1638）画『源氏物語画帖』（徳川美術館蔵）の画中にも登場し、香りが生活に密着していたことが窺える。鎌倉時代になると武士の間にも香が広まる。香木そのものの薫りを鑑賞する「一本炷」の方法が広まり、それらを識別する為に香木に名前が付けられた。そして室町時代になり、志野宗信（?-1480）や三条西実隆（1455-1537）により香道（日本の伝統的な芸道）が確立されていく。版本として出版された最古の香道書である『香道秘伝書』は寛文9（1669）年に出版され、江戸時代には香りを鑑賞する作法が整えられた。また、有力町人や庶民にも普及し、香りを当てる「組香」が隆盛し源氏香や七夕香などが考案された。特に源氏香は、菊岡沾涼（1680-1747）によって元文2（1737）年に記された『香道蘭之園』が現在の源氏香の形で初めて登場する。方法としては5種類の香をそれぞれ5包みずつ用意し、計25包みの中から任意の5包みを選び出す。客は全ての香を聞き終わると、名乗紙といわれる解答用紙に香の図と帖名を記して当てるといったものだ。香の図とは5本の縦線を引き、上端を横線で結び合わせた図だ。そうして出来る図は52通りあり、それぞれに源氏物語の各巻の名がつけられている。

香の図は簡潔で洗練された形から、その意味を離れ次第に文様として着物や蒔絵に表されるようになる。例えば三代目歌川豊国（初代国貞）作『今源氏錦絵合』「箒木」の画中には蒔絵に源氏香が描かれている。各場面と描かれた香の図は必ずしも対応しておらず、文様として形を描かれていたようだ。それでは、当代きっての売れっ子絵師であった豊国は源氏香の意味を知らなかったのだろうか。もちろんそうとは言えない。弘化年間（1844-1848）頃に出版された『源氏香の圖』（参考）には、源氏物語の場面とそれに対応する巻名、そして香の図が描かれており、その隣には各巻の巻名の由来となった和歌（参考図では源氏に対する空蟬の返歌）が引用されている。ここでは香の図と物語は対応しているのだ。寛保元（1741）年になる随筆『夏山雑談』には源氏香模様の図解説明がなされており、もちろん豊国がこの本を読んだか定かでないが豊国が活躍する100年も前から有識者の中では理解されていたことを窺い知ることができる。

絵師が描き込んだ香道具から、描かれた香りを感じ取ってみてはいかがだろうか。



参考 歌川豊国画『源氏香の圖』箒木  
(721.8-U96)

## 第3部 紫式部像

『源氏物語』を著したとされる紫式部の絵も少なくない。

石山寺の縁起に記される「紫式部が石山寺にこもって、琵琶湖にうつる月を見て、『源氏物語』を著した」という話は流布し、絵にも多く描かれた。蛇足ながら、先にあげた『湖月抄』の書名もこの伝説による。



資料 3-1 『石山寺源氏間紫式部影讃』（個人蔵）

『石山寺源氏間紫式部影讃』（資料3-1 個人蔵）は、一枚刷りで江戸時代のものである。タイトルに「源氏間」とあり、門構えの中が「日」でなく、「月」であるところに、伝説をふまえた趣向がみられる。左側に『源氏物語』を著したときに使用した硯が描かれており、由緒ある名品が好きだった当時の人たちは、さぞかし興味をもったのではないかと想像される。

「第2部 『源氏物語』の知識化」では往来物掲載の「源氏絵」等について述べたが、その掲載にあたって紫式部像も付されることが多かった。伝説では、石山寺の部屋の下にある琵琶湖上の月を見たのだが、往来物では絵像化されるにあたって、空にある月が描かれることが多い。往来物の挿絵の多くは色刷りではないので、湖面の月ではわかりにくかったからであろう。『秀玉百人一首小倉棗』に載る「紫式部石山寺参籠の図」（図6 個人蔵）では、湖面は描かれていない。



図6 『秀玉百人一首小倉棗』  
紫式部石山寺参籠の図の一部（個人蔵）

また紫式部が、どのような人物として紹介されていたかを示す一例として江戸時代に成る『百人一首』掲載「文学才女の部」の本文と挿絵(図7 個人蔵)を以下にあげる。

紫式部は藤式部と号す。上東門院の女房也。越前守為時むすめにて、右衛門の佐宣孝に嫁して、大式の三位を生めり。ある時齋院より門院へ、めづらしき双紙やあり、と御尋ありしによりて、紫式部に仰ありて、式部、石山にこもり、折ふし八月十五夜の月の湖水にうつりて心もすみわたり、物がたりの風情、心にうかみければ、まず須磨明石の両巻を書きとどめ、それより次第に書そへて、五十四帖になして奉りけり。後に六帖を加へ源氏物語六十帖といふ也。和語の双紙、この物語に過ぎたりしはあらじといふ。

挿絵では、白黒のため湖水の月はわかりにくく、紫式部は、月そのものをみている。

なお、現代人の教養では、『源氏物語』は「五十四帖」だが、かつては「六十帖」と説かれることもあった。これには宗教的な背景があるのだが、ここではふれない。

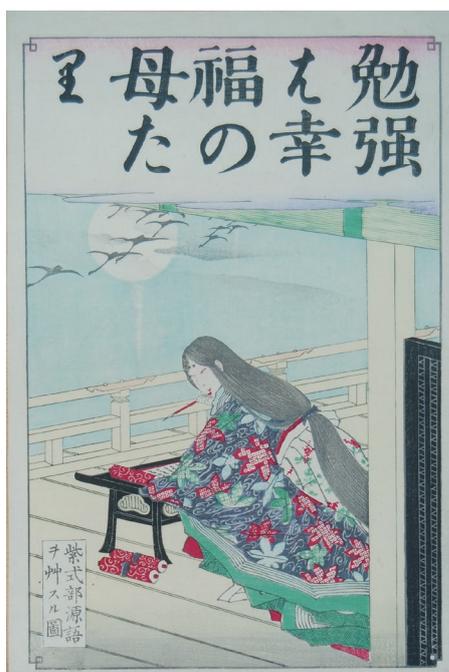
また、絵師は不明だが、第二次世界大戦前のものと考えられる絵(資料3-2 個人蔵)がある。左下に「紫式部源語ヲ舂スル図」とある。「源語」は「源氏物語」の略語であり、絵は石山寺で執筆している場面である。「勉強は幸福の母たり」という標語は、紫式部が才女であると信じられていたからにほかなるまい。

さて、絵に関しては「雁」を描くことによって「月」と認識させ、空色ながら水色でもある色使いはうまい。しかしながら、いきなり卷子本に執筆するか、という「つつこみ」をいれたくなるし、また旧暦八月十五日の夜に、そのような場所にいたら寒いのではと思われるが、これは月岡芳年(1839-1892)『月百姿』のうちの「石山月」(資料3-3 個人蔵)を参照したのかもしれない。石山寺の「源氏の間」

からでは、絵に描かれたような切り立った山は見えないが、タイトルの「石山」を表現したものであろう。むろん頼杖をついて月をながめているのは紫式部である。



図7 『百人一首』文学才女の部(個人蔵)



資料3-2 紫式部源語ヲ舂スル図(個人蔵)



資料3-3 『月百姿』石山月(個人蔵)



資料 3-4 『雪月花』  
近江石山 秋の月 紫式部 (個人蔵)

以上2点が座像であったので、近代を代表する浮世絵師揚州周延(1838-1912)の『雪月花』「近江石山 秋の月 紫式部」(資料3-4 個人蔵)をあげておきたい。このように立像も浮世絵で描かれている。

芳年も周延も、紫式部を官女の姿で描いているが、江戸時代風に描かれたものもある。笠亭仙果(1804-1868)によって『紫式部一代話 根源実紫』が著されている。その八編(1859)(資料3-5 個人蔵)には「紫女閑室に源語を綴る所」として次の挿絵がある(赤色は後人によるもの)。なお、「紫女」とは紫式部のことである。絵は梅蝶楼国貞(二代目歌川国貞、のち四代目歌川豊国)(1823-1880)によるものである。髪飾りなど、明らかに江戸時代風になっている。

一筆庵主人(溪斎英泉)作・一陽斎豊国(二代目国貞)画『其ゆかり鄙のおもかけ』三編上(資料3-6 個人蔵)には、欄外に「貞享年刊印本今様榮花物語に出る図を模す」とあり、「富川房信画」の「石山にこもりける」紫式部像を模写したものらしい。



資料 3-5 『紫式部一代話 根源実紫』八編  
紫女閑室に源語を綴る所 (個人蔵)



資料 3-6 『其ゆかり鄙のおもかけ』三編上 (個人蔵)



資料3-7 昭和二年朝日カレンダー（其四）（個人蔵）

このように様々な紫式部像が描かれたが、最後に歌川広重<sup>うたがわひろしげ</sup>（1797-1858）・国貞の合作をあげたい。平成になっても、カレンダーに浮世絵を用いることがあるが、昭和にもそのようなことがあった。東京朝日新聞社発行「昭和二年朝日カレンダー（其四）」（資料3-7 個人蔵）は、広重・国貞の合作『風流源氏』シリーズのうち「つくだ」（佃）を用いたものである。広重は資料3-8（複製）のような伝統的なものも描いている。しかし資料3-7の女性画は国貞によるものなので近世的である。これは、もともと三枚続きのものだが、一枚にまとめている。もともとの浮世絵がどのような構図であったかは、インターネットで「広重 風流源氏」で検索すればヒットすると思われる。

タイトルの『風流源氏』がなければ、江戸の佃で月見をしている女性を描いた絵に過ぎないが、『風流源氏』シリーズなので、『源氏物語』との接点を見つけなければならない。手前に冊子、筆等が置かれた文机があり、月を見ているとなれば、石山寺で湖水上の月を見て『源氏物語』を著す紫式部像を意識して、描かれたものであることがわかる。

本題から外れるが、このカレンダー、平成生まれの方には違和感があるのではないか。

具体的には、左端上段「祭日」に「大正天皇祭」（12月25日）があり、下段「季節行事」に「クリスマス」（12月25日）があるところなどである。



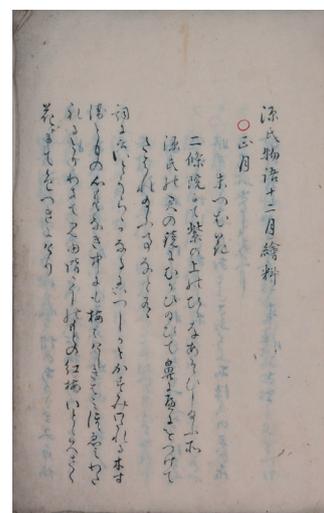
資料3-8 『風流源氏』 つくだ（複製）（個人蔵）

## 第4部 源氏絵の世界

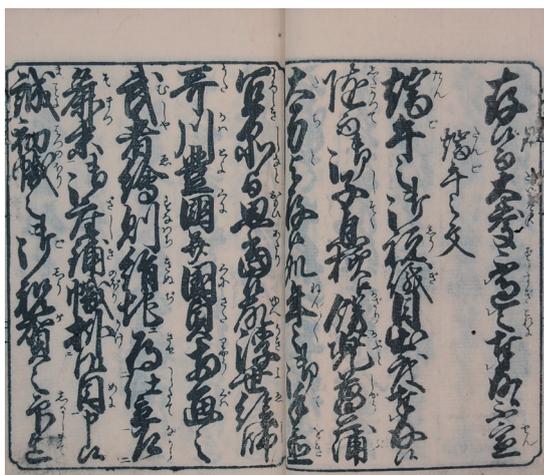
『源氏物語』のビジュアル化は、一説によれば物語成立直後から始まったとされ、描き続けられた「源氏絵」は、現存するものだけでもかなりの数にのぼる。源氏絵は、当初は手書きであり、後も手書きで描かれ続けている。たとえば、『源氏物語十二月絵料』（資料4-1 個人蔵）の巻頭には、各月に絵として使用するのにふさわしい『源氏物語』の場面が記されている。

その一方で、江戸時代になると出版物の一部に掲載されたり、そのものが出版されるようになる。

『源氏物語』をビジュアル化するにあたって、物語の読解がなされた上で、源氏絵が描かれる一方、そうした『源氏物語』本文の挿絵にもなる源氏絵とは別に、『源氏物語』の翻案であり、『源氏物語』をふまえているらしいことはわかるが、オリジナルとは必ずしも近くない、特有の潤色<sup>じゆんしよく</sup>を加えた源氏絵が描かれ、出版された。



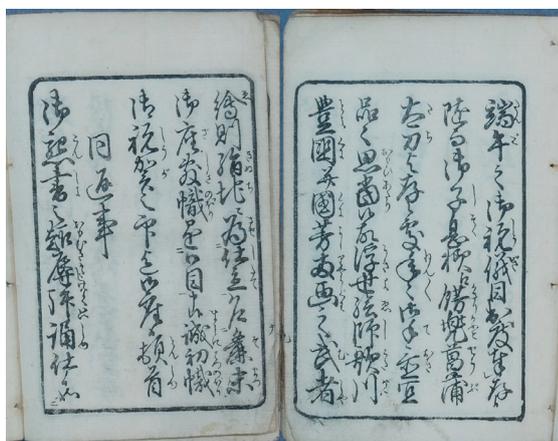
資料 4-1 『源氏物語十二月絵料』  
(個人蔵)



資料 4-2 『世俗通用 一筆啓上』(個人蔵)

今回の展示では、二代目歌川国貞（梅蝶楼国貞）の描いた『紫式部源氏かるた』（1857）のうちの、特に近世的なオリジナリティのあるものを核とし、その他、三代目歌川豊国（初代歌川国貞）（1786-1864）の描いた「源氏絵」などを参考として展示することにする。豊国は、天保の改革で絶版になったことで知られる柳亭種彦（1783-1842）作『修紫田舎源氏』の画を担当したことで知られる。この草双紙、ベストセラーになり、源氏物語の名場面を浮世絵にするのが流行、ここから浮世絵の「源氏絵」というジャンルが生まれたともされる。

かつては「六大浮世絵師」として、鈴木春信（1725-1770）、鳥居清長（1752-1815）、喜多川歌麿（1753-1806）、東洲斎写楽（生没年不詳）、葛飾北斎（1760-1849）、歌川広重がとりあげられることが多かったが、豊国も国貞も当時名高い浮世絵師であった。



資料 4-3 『世俗通用 一筆啓上』(個人蔵)

式亭三馬<sup>しきていさんば</sup>（1776-1822）が編んだ『世俗通用 一筆啓上』（1814）（資料4-2 個人蔵）には、端午の御祝儀に、豊国と国貞が武者を描いた絵を座敷幟に仕立てた旨が記されている。これに対する返事に「当時高名の浮世絵師」と記されている。

また『世俗通用 一筆啓上』は多少文言を変えて板行され続ける。国貞が四代豊国になってから板行されたと考えられるものでは文面が「豊国と国芳」のペアになっている（資料4-3 個人蔵）。



資料 4-4 『其ゆかり鄙のおもかけ』 三編下（個人蔵）



資料 4-5 『紫式部源氏かるた』 梅がえ

なお、国貞の浮世絵は、自らが描いた草双紙の表紙絵などから取り入れられたり、またその逆もあり、参考までに示しておきたい。国貞が描いた『其ゆかり鄙のおもかけ』三編下（資料4-4 個人蔵）と『紫式部源氏かるた』の「梅がえ」（資料4-5）には、よく似たところがいくつもあることにお気づきいただけるのではないかな。

ここでは、今回の展示で核となる浮世絵について、国貞、豊国、近代の有名絵師尾形月耕<sup>おがたげっこう</sup>（1859-1920）の以下の作品を比較しながら解説する。

国貞画『紫式部源氏かるた』（721.8-U96）

豊国画『源氏香の圖』（721.8-U96）

月耕画『源氏五十四帖』（個人蔵）

和歌で、以前に詠まれた歌の意味や語句を取り入れて《新しく》作歌することを「本歌取り」という。文化の「伝統と創造」とは「本歌取り」のようなものである。今回の展示のテーマは「江戸の遊び心」である。江戸時代のクリエイターは「遊び心」をもって「伝統」をリメイクしたり、部分的に利用して「創造」した。教養のある人は〈作品〉の「伝統」「遊び心」「創造」を楽しみ、「伝統」を理解できない教養のない人もその「創造」を楽しんだ。

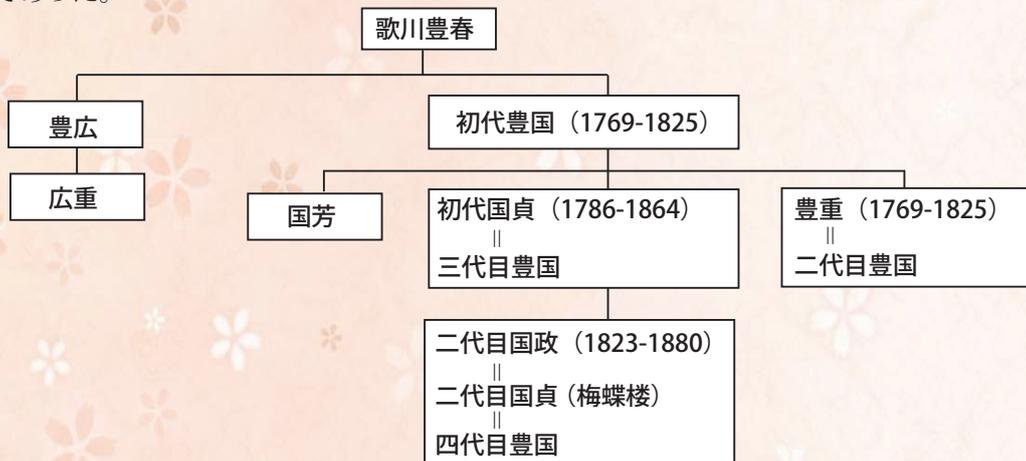
浮世絵には、まさに大胆にリメイクしたものがある。そこで、今回の展示では『源氏物語』の巻順ではなく、別のストーリーを立て紹介することとした。無制限とはいかないので、異類物を取り入れた「夕顔」（幽霊）「蜻蛉」（鷺娘）「幻」（宇宙人かぐや姫）、人気芸能物を取り入れた「紅葉賀」「須磨」「松風」、ペットを飼う女性の衣装に注目して「若菜」「若紫」、衣装のない女性を描いた「葵」を取り上げ、最後は、展示をご覧いただいた方々のご多幸を願って、ハッピーエンド仕立ての「夢浮橋」としている。

## 国貞と豊国

幕末の浮世絵界で最大勢力だったのが「歌川派」である。歌川豊春を祖とする。豊春門下に初代豊国（1769-1825）と豊広があり、豊広一門からは初代広重が、豊国一門からは、二代豊国（前名・豊重）、初代国貞（1786-1864）、国芳（1797-1861）などが出た。

初代豊国の養子となり、死後、二代目となったのが豊重である。ところが初代国貞が二代目豊国を称する。このあたりの事情は、「お家元ゴシップ」のごとく諸説紛々。二代目が二人もいるなど迷惑千万、区別する必要があるので今日では国貞を「三代目豊国」としている。住んでいた場所から、二代目を「本郷豊国」、三代目を「亀戸豊国」といったりもする。ちなみに、今回の図録にも登場する『源氏香の図』『修紫田舎源氏』『今源氏錦総合』は三代目の豊国の作。

さて、初代国貞を継いで二代目国貞となったのが、二代目歌川国政（1823-1880）。初代国貞が二代目豊国を称したので、二代目国貞は後に三代目豊国を称するが、実は四代目。はなはだややこしいことになっている。二代目国貞の時に「梅蝶楼」といっており、『紫式部源氏かるた』はこの時の作であった。



# 夕顔 (ゆうがお)



国貞画『紫式部源氏かるた』 夕がほ



豊国画『源氏香の圖』 夕顔



月耕画『源氏五十四帖』 夕顔

「夕顔」巻の源氏絵は、夕顔の花を載せた扇を手渡す場面が描かれることが大半である。豊国も月耕もその場面を描いている。往来物の挿絵でも、この巻を扇と花を描くことによって示している。

ところが、国貞は、そこに注目せず、夕顔が物の怪におそわれて死ぬ場面に注目した。

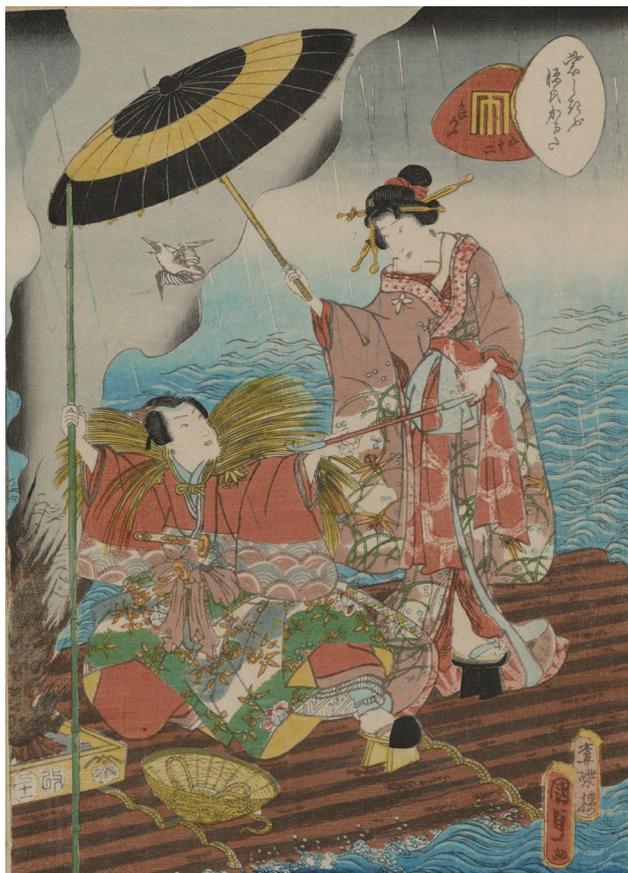
『源氏物語』のこの物怪の場面は、河原院で宇多法皇と一夜を過ごす京極御息所が、源融の霊におそわれたという伝承による、とされることが多い。にもかかわらず、国貞の絵は女の幽霊である。

それはなぜか。

注目したいのは、中央の上に描かれた道具である。これは牡丹灯籠<sup>ぼたんどうろう</sup>である。ということから、この浮世絵の幽霊は、中国の怪奇小説集『剪灯新話』<sup>せんとうしんわ</sup>に収録された「牡丹燈記」を翻案した、浅井了意<sup>あさいりょうい</sup> (1612?-1691) の怪奇話集『御伽婢子』<sup>おとぎぼうこ</sup>などによったと考えられる。

ちなみに三遊亭圓朝による落語(怪談噺)、三代目河竹新七による歌舞伎でも知られ、日本三大怪談のひとつにあげられる(他に「四谷怪談」「皿屋敷」)。かつて映画化されたこともあるので、ご覧になった方もいらっしゃるのではないかと。今日でも怪談の時期になると上演されることがある。

# 蜻蛉（かげろう）



国貞画『紫式部源氏かるた』かげろふ

「蜻蛉」は、弱々しく命短い虫として認識されていたが、「源氏絵」ではトンボとして描かれる。この巻は、蜻蛉をみながらに、はかない生涯であった大君、中君、浮舟の三姉妹のことを思い出し（この時点で、薫は浮舟の生存を知らない）、しみじみとしている薫が描かれることが多い。月耕もその定型をおさえ、薫の目線の先にトンボを描いている。豊国は、巻頭の使いの場面を描いている。

ところが、国貞はまったく異なるものを描いた。

月岡芳年は『新形三十六怪撰』の一点として「鷺娘」を描いている。

「鷺娘」は、鳥である鷺が、その姿を娘に変身して踊るといふ歌舞伎・日本舞踊の演目である。現代では板東玉三郎のものが高い評価をえており、「シネマ歌舞伎」で上映されることがある。「鷺娘」の浮世絵には、鈴木春信による傑作がある。

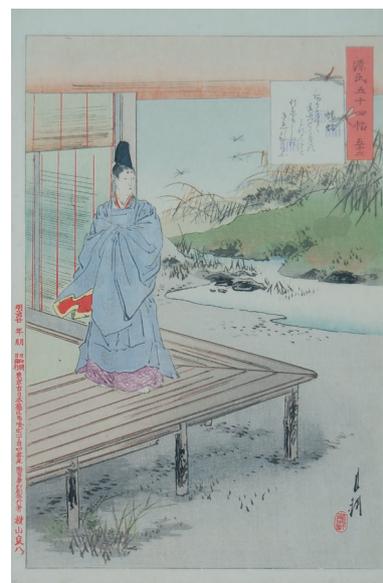
この「鷺娘」をふまえたと思われるのが、国貞の「かげろふ」巻の絵である。左上部に描かれた鷺を「蜻蛉」に見立てている。

ではこの煙は何なのか。「反魂香<sup>はんこんこう</sup>」の煙であろう。反魂香とは、焚くとその煙の中に死者の姿が現出するという伝説上の香である。白居易の詩「李夫人」に、道士が調合した霊薬を焚いた煙の中に李夫人の魂がみえたとある。江戸時代の文学、芸能にもよく出てくる霊薬である。

「蜻蛉」巻には、浮舟が入水した後、横川の僧都に発見され、加持祈祷により物怪が調伏され、浮舟の意識が戻る場面がある。国貞は、ここをふまえて表したのである。複数の有名な話を、少しずつつまみ食いするかのよう描かれたのが国貞の源氏絵である。



豊国画『源氏香の圖』蜻蛉



月耕画『源氏五十四帖』蜻蛉

# 幻（まぼろし）



国貞画『紫式部源氏かるた』 まぼろし



豊国画『源氏香の圖』 幻



月耕画『源氏五十四帖』 幻

煙に関連して「幻」巻を取り上げておきたい。光源氏がこの上なく愛した紫の上は、八月十四日の明け方死去、十五日の暁に火葬の煙となって昇天する。このことは「幻」巻の一つ前の「御法」巻に記されている。豊国は、梅が枝を持つ匂宮に慰められる光源氏を描いた。

この巻の「源氏引歌」は

大空を通ふ幻夢にだに見えこぬ玉の行方尋ねよ

であり、これをふまえた源氏絵が多い。月耕は、紫の上を慕い、大空をながめている源氏の様子を描いている。

ところが国貞は、火葬の日が中秋の名月であることから、『竹取物語』と重ね合わせて描いた。月から雲に乗ってかぐや姫が来るかのように描かれているが、髪型が出家を表しており、この世から去っていく様を描いている。

『竹取物語』にしても『源氏物語』にしても、再び逢うことができなくなる悲しい場面なのだが、国貞の絵にはそうしたものが感じられない。近世的なものが、こうしたところにある、といってもよいのではあるまいか。

# 紅葉賀（もみじのが）



国貞画『紫式部源氏かるた』紅葉の賀



月耕画『源氏五十四帖』紅葉賀



国芳画『源氏雲浮世総合』明石  
(個人蔵)

「蜻蛉」巻と同じく、芸能を取り込んだものとしては「紅葉賀」巻がある。

月耕がそうであるように、この巻を描く源氏絵は、菊を挿した光源氏と紅葉を挿した頭中将が青海波を舞う場面を描いた。『源氏物語』全巻を通して、最も多く描かれた源氏絵の名場面の一つといっても過言ではあるまい。

ところが、国貞は、それを能などで知られる「紅葉狩」を描いた。平維茂が鹿狩に山に入っていく、そこで出会った女たちが勧める酒を飲み、酔い伏す。女たちは実は鬼であるが、平維茂に退治される。いずれも「紅葉」と舞うということが共通している。この絵にも近世的なおかしみを感じられよう。

「紅葉狩」は歌舞伎でもよく演じられる。こうした演劇と結びついた源氏絵として参考までに国芳『源氏雲浮世総合』(個人蔵)をあげておく。上段に「源氏」、下段に歌舞伎の名場面が描かれる。「明石」では、「加賀見山旧錦絵」のお初が身の「あかし」を立てる場面が描かれている。

# 須磨 (すま)



国貞画『紫式部源氏かるた』須磨



豊国画『源氏香の圖』須磨



月耕画『源氏五十四帖』須磨

謡曲を参考としたものをもうひとつあげておきたい。「須磨」巻である。

「須磨」巻を描く源氏絵は、都を思い、海を眺める源氏が描かれることが多く、須磨の地を表すために千鳥が添えられる。豊国は立像、月耕は座像の光源氏を描いている。

国貞の源氏絵は、「松風村雨」をふまえている。諸国を旅する僧が、在原行平（有名な業平の兄）が愛した海女の姉妹「松風」「村雨」の墓を弔い、その姉妹の幽霊が行平との恋を語るという内容である。海女なのでその日にとれた魚の入ったたらいを頭に置き、須磨の浦であることを示すために、千鳥が飛んでおり、水平線は夕方を表すために赤く描かれている。

# 松風（まつかぜ）



国貞画『紫式部源氏かるた』 松風



月耕画『源氏五十四帖』 松の風

月耕の源氏絵では、得意とされた琴を弾いている明石上が描かれる。また屋敷の手前に川が流れていることから、父の建てた大堰川のほとりの邸宅にいることがわかる。

国貞は、謡曲の「松風村雨」を、再び「松風」巻で用いる。諸国をめぐる僧が吊った墓とは、磯辺にある、いわくありげな松だった。国貞は、松風、村雨の亡霊とその墓を描いている。なお昔から、「熊野松風米の飯」（「熊野」「松風」は、米の飯のようにだれにも好まれる）と言われるほどで、「熊野」とともに、非常に高い人気がある。ここでは明治時代の浮世絵師安達吟光（1853-1902?）の『大日本史略図絵』十九「行平勅に反し須磨の浦に配せらる」（個人蔵）を参考までにあげる。



『大日本史略図絵』十九  
行平勅に反し須磨の浦に配せらる（個人蔵）

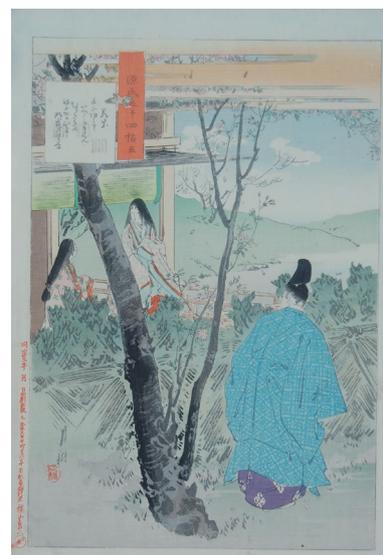
# 若紫 (わかむらさき)



国貞画『紫式部源氏かるた』 若紫



豊国画『源氏香の圖』 若紫



月耕画『源氏五十四帖』 若紫

十八歳の春、光源氏は、籠から逃げた雀の子を追って縁先に出てきた少女「紫の上」を垣間見る。逢いたくとも逢えなくなった女性「藤壺」への恋情が、その姪である少女に向かうことになった場面である。豊国のように、伝統的源氏絵では、画面下に光源氏は描かれる。月耕も同様である。

一方、国貞は実に近世的である。「紫の上」にあたる女性を美しい遊女として中央に大きく描くとともに、鳥籠も実に大きく描いている。それを見ている光源氏は小さく描かれている。また雀は一羽ではなく、複数描かれており、女性達の目線の先に飛んでいったことをうかがわせる。ちなみに月耕の源氏絵、どこに雀がいるかわかりだろうか。

# 若菜上 (わかなじょう)



国貞画『紫式部源氏かるた』 かしわ木

光源氏に招かれた柏木らが蹴鞠をしているところを、女三の宮が御簾の内側から立って眺めていたが、室内から出た唐猫によって御簾がめくられる。そのとき、柏木は、女三の宮を見て、恋するようになる。

豊国は、伝統的な描きぶりで、桜の下にいるのが柏木であるが、国貞は二人が接近している。室内からの視点で描く作例はあるが、月耕のは御簾が巻き上がっている。月耕は、こうしたところに創意工夫がある。そもそもこの場面、原作では「若菜上」巻なのだが、「若菜下」巻に描かれることも多く、国貞にいたっては「かしわ木」巻である。有名な場面なので、源氏絵でははずせないが、「若菜上」巻で他の場面を描く関係で、ずれこむことが多い。なお、「柏木は鯉ぶしからうたいかけ」(『文のもゝぢ』)という雑俳が詠まれている。猫の好物が鯉節であることをふまえ、女三の宮を見るために、柏木は猫を利用したというのである。こうした「邪推」が近世的な面白みである。なお、周延によって同様の場面が三枚続きの浮世絵に描かれており、ここでは右端の一枚をあげておく。



豊国画『源氏香の圖』 若菜下



月耕画『源氏五十四帖』 若菜下



周延画『二品親王女三宮』(個人蔵)

## 葵 (あおい)



国貞画『紫式部源氏かるた』 あふひ



月耕画『源氏五十四帖』 葵



国周画『現時五十四情』玉葛

「葵」巻の一番の見所は、葵上と六条御息所の二人による見物の場所の取り合い（車争い）である。ちなみに葵上の従者から辱めを受けた六条御息所が葵上を恨み、その生霊がとりついて葵上が発作で死ぬ。

源氏絵では、車争いの場面が描かれることが多く、月耕もその場面を描いている。ところが国貞は例によって、その場面を描かない。

かつてテレビで放映されていた時代劇「水戸黄門」には女忍者の入浴シーンがあり、初期の頃の二時間ものサスペンスドラマにも濡れ場があったものである。国貞も少々色っぽいシーンを「葵」巻で描いている。体を洗う場面は、たとえば豊原国周（1835-1900）も『現時五十四情』第廿二号「玉葛」（個人蔵）で描いているように、よほど好まれたようで、同じような構図の浮世絵は少なくない。

なお言うまでもなからうが『現時五十四情』は『源氏五十四帖』をもじったタイトルである。

# 夢浮橋 (ゆめのうきはし)



国貞画『紫式部源氏かるた』 夢の浮はし



豊国画『源氏香の圖』 夢浮橋



月耕画『源氏五十四帖』 夢浮橋

「夢浮橋」巻は、薫が浮舟のことを確かめるために横川の僧都を訪れ、浮舟の生存を知った薫は、浮舟の弟に手紙を託すが、浮舟は弟にも会わず、手紙も受け取らないことが書かれている。

豊国は、小野の里に住む浮舟に尼君が会い、また薫からの手紙を見ている、伝統的な構図で描いている。月耕は、薫と横川の僧都が浮舟のことを話している場面で、これも伝統的である。

ところが、国貞の絵はあまりにも原作離れしている。有名な昔話「浦島太郎」の最終場面を思い出しで欲しい。現代の絵本の類では、玉手箱を開けておじいさんになって終わるものが多い。しかし、江戸時代の御伽草子におさめられた浦島太郎は最後に鶴になって飛んで行き、鶴亀、めでたし、めでたし、なのである。江戸時代の庶民は、<sup>かんぜんちゆうあく</sup>勧善懲悪とかハッピーエンドが好きだった。そのことをふまえると、国貞の描いた絵はわかりやすく、蓬莱の台、宝舟の台で、めでたし、めでたし、ハッピーエンドとなっている。

## 歌川国貞（三代豊国）と源氏絵

文政12（1829）年に出版が開始された合巻『修紫田舎源氏』は、江戸末期における源氏絵ブームの火付け役となった。作者は柳亭種彦、挿絵は初代歌川国貞（三代歌川豊国）である。柳亭種彦は国学者など知識人との交流が深く、狂歌・俳諧・川柳・絵画を好み、特に芝居好きで知られている。歌川国貞は幼い頃より浮世絵を好み、14歳の時すでに当時の人気絵師歌川豊国に入門していた。文化4（1807）年に22歳で初筆が売り出されるが、特に美人絵、役者絵において評判が高かった。落款は「国貞画」のほか「五渡亭」、「香蝶楼」などを好んで用いており、天保15（1844）年に二代目豊国（実際は三代目）を襲名してからは「豊国画」を用いるようになる。

『修紫田舎源氏』には作者種彦が得意とする歌舞伎や浄瑠璃の要素が多く取り入れられている。物語は推理仕立てで、『源氏物語』の設定、登場人物を室町時代の武家社会へと置き換え、将軍の側室の子である主人公足利光氏がお家騒動を解決するために奔走するというものである。出版にあたっての下絵は種彦によってかなり緻密に作られたが、国貞はその意に従いながらも自らの創造性を遺憾無く発揮し、光氏という独特のキャラクターを作り出した。細面で切れ長の目に鼻筋の通った顔貌、そして意匠を凝らした着物を着こなす姿はいかにも当代の光源氏といった風貌で、トレードマークの海老茶筌髷えびぢやせんまげとよばれる髪型は種彦も驚いたといわれるほど奇抜なものだった。

大評判を呼んだ『修紫田舎源氏』だが、天保13（1842）年に天保の改革によって絶版となり、同年に柳亭種彦も亡くなる。しかし改革が失敗に終わると、再び続編『其由縁鄙洒倂』そのゆかりひのおもかげ、『足利絹手染紫』あしかがぎめてぞめのむらさき、類本として『薄紫宇治曙』うすむらさき うじのあけぼの、『江戸鹿子紫草紙』えどかのこむらさきぞうしなどが次々と版元、作者を替えながらも国貞の挿絵で出版を開始される。そしてこれらの挿絵をもとに一枚絵や三枚揃の錦絵も出版されるようになり、のちに『其姿紫の写絵』、『江戸紫五十四帖』、『今源氏錦絵合』など『源氏物語』にちなんだ五十四枚揃物も出版される。国貞が描く大胆な柄の着物を身にまとった登場人物の艶やかな姿は、錦絵ならではの美しさで当時の人々にさぞかし喜ばれたであろう。またこの源氏絵ブームは、同時代の歌舞伎狂言と役者似顔絵の影響も大きい。天保の改革以前より『修紫田舎源氏』に関連する歌舞伎はすでに上演されており、改革後も歌舞伎の興行と合わせて、人気役者が演じる主人公光氏を描いた見立絵が多く出版されている。嘉永6（1853）年には再びお咎めにより役者見立絵の揃物は一時停滞するが、その後は歌川広重との合作なども生まれる。『双筆五十三次』では広重の風景画を背景に派手な歌舞伎衣装を羽織る光氏が登場するが、物語の文脈を離れて描かれる光氏は、国貞の遊び心に加えて幕末の源氏絵の広まりを示しているといえよう。さらに元治元（1864）年に国貞が79歳で亡くなった後も、源氏絵としての光氏は二代目国貞（梅蝶楼国貞）や歌川派の絵師達によって明治初期まで描き続けられるのである。



参考 広重筆・国貞画『双筆五十三次』京  
(国立国会図書館ウェブサイトより転載)

## 第5部 デジタル技術と資料の融合 ～源氏絵から読み解く平安時代のくらし～

近年、浮世絵を題材とした展示会が多く開催されているが、絵の展示だけでなくデジタル技術を用いた表現のものも多い。ゆえに、浮世絵が文化資料というだけでなく、より歴史にふれることができる、色合いと構図が新鮮なアート作品に感じている方々も多いはずである。しかし、絵画鑑賞において、おのこの興味にあわせた解説を提示することは難しく、デザイン的な面白さ以上に、その絵の中に描かれている文化に踏み込むことは難しいのではないかと考える。江戸時代の絵師が、遊び心をもって描いた、浮世絵を身近に感じ、描かれているものや人に興味をもち、浮世絵に対する知識を取得する方法を実現できないかと考え、身体動作を使ったインタラクティブな操作を可能とするKinectを用いた浮世絵探索システムの開発を行ってきた。



図1：浮世絵探索システム

この「浮世絵探索システム」(図1)では、東海道五十三次をベースに「橋」「川」「店」など絵の中心モチーフとなるもので複数の浮世絵間をつなぎ、旅をしている感覚の中で鑑賞者がそれぞれのストーリーを思い描きながら、その浮世絵に描かれている江戸時代の人々の生活を垣間見ることができる。浮世絵の世界をより楽しんで旅してもらうために、閲覧者の顔写真を最初に撮影し、浮世絵に登場する人物にあてはめ、おのこの絵の中を歩きまわり様々な視点を探す楽しみを実現している。浮世絵には土地、人物、季節等で複数枚につながるものがある。鑑賞者の興味にあった視点からスタートし、文化、技術の変遷を感じ、他の視点からの鑑賞へ導くコンテンツの提示方法を実現するために、「浮世絵探索システム」をさらに発展させ、「浮世絵鑑賞システム」を開発した。

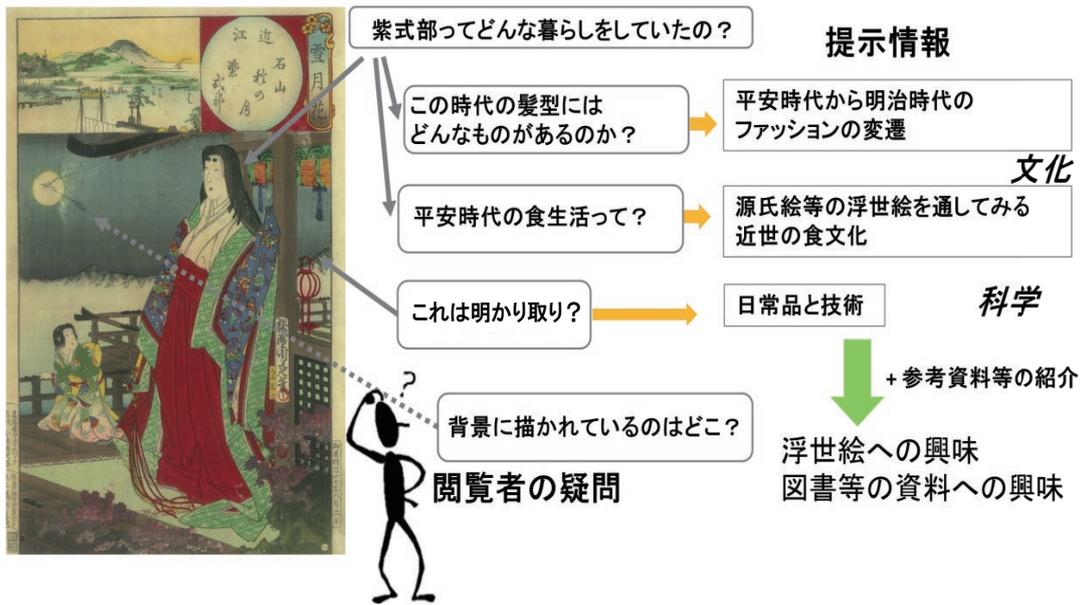


図2：観覧者の興味に対応したコンテンツ提示

今回の展示において公開する「浮世絵鑑賞システム～源氏絵から読み解く平安時代の暮らし～」においては、紫式部を描いた浮世絵から、文化、四季に関連する様々な浮世絵や図書につなげる仕組みを実現した。たとえば、平安時代の着物から始まり、着物のパターン、西洋文化が入ってきてからの着物の変化などを示す浮世絵、また服飾に関する解説を見ることができる図書へとつながり、観覧者の興味に対応したコンテンツ表示が可能になっている（図2）。明かり取りなど日用品が近代化により変化していくさま、さらには、日本の四季を源氏絵から感じ取ることができるよう、虫の音や、浮世絵の一部を動かすことで、より風情を感じることができるようにした。秋の紅葉が背景として描かれた豊国画『源氏香の圖』『紅葉賀』では、観覧者が手をひらひらと動かすと紅葉が舞い、徐々に同じシーンを描いた国貞画『紫式部源氏かるた』『紅葉の賀』が表示される。冬と春を描いた「朝かほ」「若紫」においても同様の仕掛けをほどこし、季節だけではなく、時代による描かれ方の違い、さらには装飾品等の違いから描かれた時代へと興味が広げる効果を生み出した。このシステム鑑賞後に他の浮世絵も見て、「ここに描かれているものはなんだろう？」「この絵の季節は？」「どんな虫の音が聞こえたのだろうか？」といった五感を利用した鑑賞がなされることを期待している。

浮世絵をみながら、さらに解説文字をみて情報を得るということはとても困難である。本システムでは、音声や絵の印象をかえすぎない程度の動きを加え、さらに書籍等の提示により、『源氏物語』の世界にふれ、そこから日本の文化への興味へと導く。システムを利用した鑑賞後、実物の浮世絵を見た場合に、より深く知的活動へと結びつけることができるように、浮世絵と他の題材の浮世絵、さらには図書などの資料に結びつける仕組みになっており、鑑賞体験から資料へのつながりを感じることができる（図3、図4）。

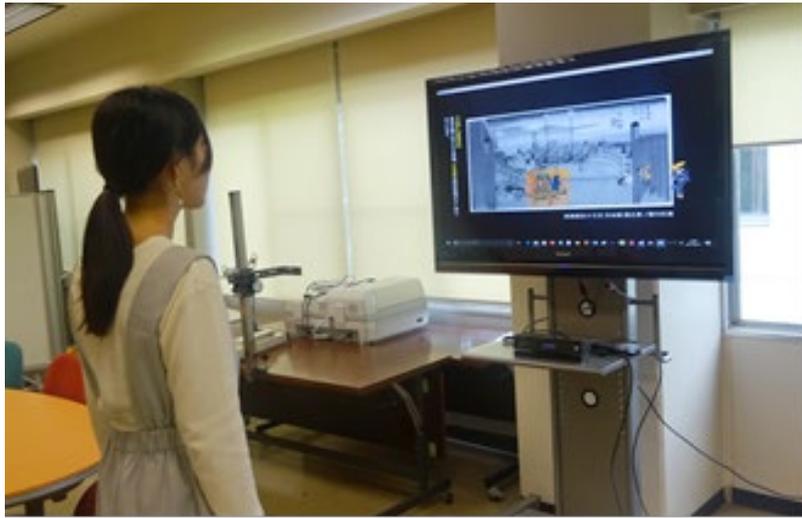


図3：システム使用時の様子



図4：鑑賞体験から資料へのつながり

本システムにおいて利用したデバイス Kinect は動作情報を特別な装備の装着なしで得ることができ、鑑賞者の動作情報によって提示する情報に変化を与えることができる。従来の絵画展示の前後にこのシステムを利用できるエリアをつくることで、より絵画鑑賞体験を充実させるだけでなく、資料と利用者を結びつけ、さらには資料自体に付加価値を与えることができると考える。教育現場においては、歴史、地理といった教科の学習との結びつきをもたせた知識を提示していくことで、一つの資料をみたときの視点を広げるための学習教材としての浮世絵の活用も実現できる。地域の文化を身近に感じることができ、さらには、日本文化に関わる研究者がコンテンツ制作に関わり、日本語特有の動きと言葉の表現といった機能を浮世絵鑑賞システムに取り入れることで、様々な分野の人々が関わり浮世絵をベースとしたコンテンツを制作することができ、最終的には先人の知識が集約された資料の伝承を目指している。

なお、一連のシステムは研究室所属の多くの学生が開発に携わり、完成したものである。  
(2016年度 吉原美香子・井浦菜摘・村上満美、2017年度 川島芙実・瀧澤晴奈・山田祥平)

# 掲載資料一覧

資料番号	資料名	資料番号	資料名
第1部		第4部	
資料 1-1	『源氏物語』(ル 120-44/ 貴)	資料 4-1	『源氏物語十二月絵料』
資料 1-2	『源氏物語』(ル 120-370/ 貴)	資料 4-2	『世俗通用 一筆啓上』
資料 1-3	『源氏物語』(ル 120-46/ 貴)	資料 4-3	『世俗通用 一筆啓上』
資料 1-4	『花鳥餘情』(ル 120-49)	資料 4-4	『其ゆかり鄙のおもかけ』 三編下
資料 1-5	『花鳥餘情』(ル 120-369)	資料 4-5	『紫式部源氏かるた』 梅がえ*
資料 1-6	『湖月抄』(ル 120-257)	夕顔	『紫式部源氏かるた』 夕がほ*
資料 1-7	『仙源抄』(ル 120-190/ 貴)		『源氏香の圖』 夕顔*
資料 1-8	『源語導嚆抄』(ル 120-57/ 貴)		『源氏五十四帖』 夕顔
第2部		蜻蛉	『紫式部源氏かるた』 かげろふ*
資料 2-1	『秀玉百人一首小倉棗』		『源氏香の圖』 蜻蛉*
資料 2-2	『池鯉鮒』 源氏物語を読む婦人		『源氏五十四帖』 蜻蛉
資料 2-3	『永操百人一首』 源氏目録歌並香圖	幻	『紫式部源氏かるた』 まぼろし*
資料 2-4	『女礼式之図』		『源氏香の圖』 幻*
資料 2-5	明治時代に成る石版画		『源氏五十四帖』 幻
資料 2-6	柳屋の広告	紅葉賀	『紫式部源氏かるた』 紅葉の賀*
資料 2-7	『江戸自慢三十六興』 佃沖		『源氏五十四帖』 紅葉賀
図 -1	『御家流 女用文宝箱』 の一部		『源氏雲浮世絵合』 明石
図 -2	『錦囊百人一首大成』 の一部	須磨	『紫式部源氏かるた』 須磨*
図 -3	『聚玉百人一首』 の一部		『源氏香の圖』 須磨*
図 -4	『其ゆかり鄙のおもかけ』 三編下		『源氏五十四帖』 須磨
図 -5	『教草女房形氣』 九編上	松風	『紫式部源氏かるた』 松風*
参考	『源氏香の圖』 箒木*		『源氏五十四帖』 松の風
第3部			
資料 3-1	『石山寺源氏間紫式部影讃』	若紫	『紫式部源氏かるた』 若紫*
資料 3-2	紫式部源語ヲ艸スル図		『源氏香の圖』 若紫*
資料 3-3	『月百姿』 石山月		『源氏五十四帖』 若紫
資料 3-4	『雪月花』 近江 石山 秋の月 紫式部	若菜上	『紫式部源氏かるた』 かしわ木*
資料 3-5	『紫式部一代話 根源実紫』 八編 紫女閑室に源語を綴る所		『源氏香の圖』 若菜下*
資料 3-6	『其ゆかり鄙のおもかけ』 三編上		『源氏五十四帖』 若菜下
資料 3-7	昭和二年朝日カレンダー (其四)		『二品親王女三宮』
資料 3-8	『風流源氏』 つくだ (複製)	葵	『紫式部源氏かるた』 あふひ*
図 -6	『秀玉百人一首小倉棗』 紫式部石山寺参籠の図の一部		『源氏五十四帖』 葵
図 -7	『百人一首』 文学才女の部		『現時五十四情』 玉葛
		夢浮橋	『紫式部源氏かるた』 夢の浮はし*
			『源氏香の圖』 夢浮橋*
			『源氏五十四帖』 夢浮橋
		参考	『双筆五十三次』 京 (国立国会図書館蔵)

※附属図書館の貴重図書は、請求記号の末尾に「/貴」と示した。

※『紫式部源氏かるた』\*『源氏香の圖』\*の請求記号は、721.8-U96で、すべて図書館情報学図書館所蔵。

※請求記号の記載のないものは個人蔵。

※ページ内の一部分を掲載したものは資料番号を「図-」とした。

企画

筑波大学図書館情報メディア系

松本 紳 (系長)

綿抜 豊昭 (教授)

時井 真紀 (講師)

筑波大学人文社会系

吉森 佳奈子 (准教授)

筑波大学附属図書館

西川 博昭 (館長)

谷口 孝介 (副館長・研究開発室長)

岡部 幸祐 (学術情報部長)

筑波大学附属図書館研究開発室

山澤 学 (人文社会系准教授)

資料提供

綿抜 豊昭

附属図書館特別展ワーキング・グループ

大久保 明美 (主査)

浅野 ゆう子

奥村 洋子

木野村 和人

清水 彩代

永濱 恵理子

中原 由美子

廣田 直美

守谷 美佐子

講演会

平成29年10月28日(土) 10:00~12:00

講演者 綿抜 豊昭

(知的コミュニティ基盤研究センター長・図書館情報メディア系教授)

オフィシャル Web サイト

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/2017genji/>

---

平成29年度 筑波大学附属図書館特別展

江戸の遊び心 - 歌川国貞の描く源氏物語の世界 -

平成29年10月11日 発行

発行 筑波大学附属図書館 ©2017

〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL 029-853-2376

印刷 前田印刷株式会社

ISBN 978-4-924843-89-9



筑波大学

*University of Tsukuba*